三上社長にきいてみた。
シリーズ「まちづくり考」 その3
～コロナ禍の一年を振り返りつつ、まちづくりの担い手として私たちの今後について考えてみた～

前号に引き続き「まちづくり考」待望の第３弾♪
このシリーズは、様々な観点から三上社長のまちづくりへの考えを聞いていくコーナーです！！

１．災害は時代を加速させる

ニューノーマル。今の状態を拒み、戦う姿勢を維持するのではなく、また、台風が過ぎるのをじっと待つのでもなく、今の状態を受け入れ、それを新しい生活様式として定着させることが大切になる。しかもそれは、起こる予定だった社会的・経済的変化（未来）が、コロナによって結果を早く求めるようになり、早いペースでの変化を余儀なくされただけだ。

「with コロナ」、コロナと共に。時代が大きく動き始めた。その変化はとても速く、私たちは試行錯誤しながら、新しい暮らし方、新しい働き方を始めた。まちづくりの分野でも、暮らし方、働き方の変化がもたらすソフト・ハード両面での変化は大きいはずだ。

２．今、何が起こっているのか

＜オンライン化＞そのうちそうなるかも知れない、と思ってはいたが、宅配や働く現場でも子供たちの教育の面でも、劇的なオンライン化、web会議、webセミナー、リモートワークが当たり前に。その結果、私たちは、私たち自身の「暮らし」を中心に物事を考え始めることになる。住む場所を選ぶにしても、学校や勤め先が近いから、といった理由ではなく、いかに暮らし易いか。それは「ワーク・ライフ・バランス」ではなく、「ワーク・ライフ・ミックス」の社会だ。一方で、特別で、高くて、危険な「リアル」は希少価値になりつつある。

＜ソーシャル・ディスタンス＞利便性を優先すれば仕方がない、と思っていた高層高密な社会から、ソーシャル・ディスタンスや外気を意識した環境整備へ。また、３密を避けるために公共交通や賑わいが嫌われた。モールのような密閉空間も駄目。そのような観点で人々が暮らす地元を再整備する必要がある。車道を減らし、社会的距離の確保のために歩道と自転車道を広くとる。現在国や地方自治体で進められているコンパクトシティの政策を進めつつ、一極集中型の高層高密から多極分散型の低層低密社会へ。

＜地産地消＞ 原材料と人件費の安いところで製造し、それを安く販売するのが当たり前だったが、安全性を含め、大切なものは多少割高でも地元産品を。グローバル経済から、地域が自立して連帯する地産地消中心型へ。国内で流通消費できる体制を整え、自給自足と供給網の国内回帰が激しく進む。さらに、近隣で遊ぶ機会が増え、地元の人々が地元の資源を見直し、地元の衣食住を楽しむようにもなりつつある。

３．問題意識

＜未来を体験してしまった＞アフターコロナとかウィズコロナについて、いろいろと取り沙汰されているが、「コロナの影響で暮らし振りも働き方も、変わらざるを得ない」、といった受け身の消極姿勢では良くない。多くの人は、オンライン化やソーシャルディスタンス、地産地消をはじめとする、「いつかは、そうなるかも」とぼんやり考えていた未来のスタイルを、この一年の間に経験してしまって、その新しいスタイルの良いところをしっかりと味わってしまった。こうなると、コロナが去ろうと去るまいと、人々の暮らし振り、働き方は、今までとは違う方向に大きく舵を切り始めるのは必然だ。その様に考えると、官民を問わず、既存（コロナ以前の）の計画をベースにしていたのでは、最早、社会の要請には応えられないことになろう。

４．変わる社会と私たちの覚悟

コンパクトシティ実現のために、多くの市町村は立地適正化計画を策定し、人口と都市機能の誘導・集積を図ろうとしているが、果たしてそれは、本当に望ましい将来像なのか。オンライン化が進む中での機能集積に、どのような意味があるのか。賑わいの創出こそ地域活性化の要のように考えられていたが、オフィスや店舗、医療施設、高等教育機関などがあっても、オンライン化が進む中、人は集まるのか。賑わうのか。そもそも将来的に見て、賑わうことが好ましいことなのか。さらには、賑わいなしで地域の活性化はあるのか。従来、評価指標の多くは、「大きいこと」「多いこと」「集積していること」「密度が高いこと」をポジティブに評価しているが、果たしてどうなのか。高層高密集積型から低層低密分散型へ。人々の選択は、働く場所本位から暮らす場所本位へ。利便性第一で暮らしが犠牲にされてきた地域は嫌われる。その時、地方都市は、どう対応すべきか。

ここは抜本的に世の中が変わると覚悟して、現状維持とか原状回復とかは考えずに、想定する未来に向けてむしろ今起きつつある変化をよく活用して行動することが大切だ。疫病流行にも、大地震・水害・地球温暖化にも耐えられる、全く新しい社会の復興を各地域が知恵を絞って進め、その中で新しい雇用や生活を生み出していかなければならない。